



## 九州ブロックのHIV医療体制整備

### —九州ブロックのHIV医療体制の整備に関する研究—

研究分担者 南 留美

独立行政法人国立病院機構九州医療センター免疫感染症内科 医長

#### 研究要旨

HIV陽性者の予後改善に伴い併存疾患をもつ患者が増加することが予想される。そのため今後は一般医療機関や介護などの施設も含めた慢性期医療体制の構築および地域における医療連携が重要になる。それを踏まえ、今年度はHIV陽性者の地域での支援状況および課題を検討するための調査を行った。その結果、九州全域で受け入れ先の確保の課題を抱えていることが明らかとなった。今後、受け入れ可能な施設のネットワーク、HIV陽性者を支援する地域支援者間の連携や当事者支援団体とHIV拠点病院の連携を図り相互理解を推進するための「HIV地域支援者ネットワーク」の立ち上げが必要と考えられた。

#### A. 研究目的

近年、新規HIV感染者数は全国的には減少しているが、九州においては明らかに減少しているとは言えない状況が続いている（新型コロナウイルス感染症の影響があった2020-2021年は除く）。また、近年、HIV治療の進歩により患者の生命予後は改善したが、代謝性疾患や腎疾患、精神疾患など多くの合併症をもつ患者の割合が増加している。患者高齢化に伴い、今後さらに併存疾患をもつ患者が増加することが予想される。そのためHIV診療に携わる専門の医療スタッフだけではなく多くの一般専門医療機関や介護などの施設も含めた慢性期医療体制の構築、地域における医療連携の必要性がより一層強まっている。

本研究はこのような地方におけるエイズ医療の問題点の把握と地方におけるエイズ医療向上を目指して行なった。

#### B. 研究方法

##### 1. HIV診療に従事する人員の確保・専門知識の普及

HIV診療における技術の習得および向上のため、例年、九州ブロック内の希望者に対しHIV/AIDS職員研修を行っている。昨年は新型コロナウイルス蔓延防止のために行うことが出来なかったが、今年度はオンラインにて研修を行った。またHIV感染症に

おける最新情報や知見の共有のための研修を拠点病院のスタッフを対象にオンラインで行った。

##### 2. 地域医療連携

各拠点病院におけるHIV陽性者の療養支援の現状と課題を把握するために九州ブロックエイズ治療拠点病院31カ所の担当医師及びMSWを対象に、①HIV支援チームの状況、②HIVを理由とした受け入れ拒否事例の有無とその理由、療養支援における今後の懸念材料、③HIV陽性者の受け入れに向けた拠点病院の地域啓発の現状と課題、④HIV陽性者の受け入れ先紹介システム（ネットワーク）の活用意向、⑤HIV陽性者の受け入れ先へのフォローアップについて、アンケート用紙による調査を実施した。

##### （倫理面への配慮）

本研究においては患者人権とくにプライバシーの保護は重要であり、特に配慮を行なった。

#### C. 研究結果

##### 1. HIV診療に従事する人員の確保・専門知識の普及

今年度はオンラインを中心に以下の研修会・シンポジウムを開催した。

(1) 第40回九州ブロックエイズ拠点病院研修会（オンライン）

- 講師2名 参加者140名

- HIV感染症の最新情報、ウイルス感染症：伝播・拡散の法則をテーマに講演を行った。
- (2) 九州ブロックエイズ診療ネットワーク会議（オンライン）
- 九州ブロック内中核拠点病院の医師・看護師・心理士・MSW・薬剤師・行政関係者70名  
職種ごとに集まり各地域における問題点について検討を行った。
- (3) 福岡 HIVネットワーク第47回シンポジウム（オンライン）
- 講師1名 参加者：48名  
HIV感染症の最新情報、九州のHIV診療における25年をテーマに講演を行った。
- (4) 第3回九州 HIVソーシャルワーク研修会（オンライン）
- 講師3名、参加者：60名  
HIVと地域連携をテーマに講演および検討会を行った。
- (5) 第7回九州 HIV看護研修会・第4回九州 HIVソーシャルワーク研修会（オンライン）
- 講師3名、参加者：25名（予定）  
HIV/AIDSの最新情報、九州におけるHIV医療の25年についての講演および症例検討会を行う予定。
- (6) 第18回九州ブロック HIVカウンセラー連絡会議 / 令和3年度九州ブロック HIVカウンセリング研修会
- 講師3名、参加者：100名（予定）  
「これまでのHIV診療の振り返りと心理職に向けて」をテーマに検討会を行う予定。
- (7) HIV/AIDS 職員研修
- 看護師コース2回：各々15名、10名
  - 薬剤師コース2回：各々11名、11名
  - カウンセラーコース1回：3名
  - MSWコース2回：各々6名、9名
  - 医師コース1回：10名
  - 栄養士コース1回：4名
- オンデマンドにて研修動画を配信。職種ごとに定められた動画を聴講したのち、各職種がオンラインにて集まり質疑応答やディスカッションを行った。例年より参加者は増加した。また研修を受講した施設からの新規HIV感染症例の紹介患者が増えた。
- (8) 地域連携のための研修
- 今年度は受け入れ施設の職員を対象とした出前研

修を8施設で行った。新型コロナ感染症蔓延を鑑み、8施設中6施設はオンラインで研修を行った。

(9) 地域臨床カンファレンス

拠点病院間の情報交換や困難症例に対する相談のため多職種が参加してカンファレンスを行った。今年度は2施設（熊本大学、九州大学）とオンラインで開催した。

(10) その他

資料の作製（カウンセリング用）や情報冊子（MSM対象）の改訂、昨年度リニューアルしたホームページ等を用いて情報発信を行った。

## 2. 地域医療連携

HIV陽性者の長期療養・在宅療養支援に関するアンケート調査の結果は以下の通りであった。

九州ブロックエイズ治療拠点病院31カ所のうち、30カ所が回答し、病院全体の回収率は96.8%であった。

- ① HIV支援チームの状況：52%がチーム医療を行っている」と回答し、チームの構成員は医師・看護師・薬剤師・MSWは100%、カウンセラーの配置は66.7%であった。
- ② HIVを理由とした受け入れ拒否事例の有無とその理由、療養支援における今後の懸念材料：HIVを理由とした受け入れ拒否を55%が経験しその理由として「HIVに関する知識不足」、「スタッフの理解不足」「HIVに関する医療・看護・介護技術不足」、「感染予防対策」が多く見られた（図1）。また、断られた事例の内容から、HIVに対する差別・偏見が受け入れに影響している事例も見られた。断られた機関種別は二次病院（113～118件）・入所施設（144件以上）が多く、いずれも福岡県・長崎県で多数の事業所に断られていた。「HIV陽性者の今後の療養支援において心配なこと」（自由記載）に関しては、九州全県の拠点病院から、受け入れ先の確保や患者の高齢化に関する記述が多く見られたことから、九州全域で将来、療養支援を必要とする患者が控えており、「受け入れ先の確保」の課題を抱えていることが示唆された。
- ③ HIV陽性者の受け入れに向けた拠点病院の地域啓発の現状と課題：HIV陽性者の受け入れのための地域啓発・研修は45%で実施されていた。研修を行っていない理由としてはマンパワー不足が半数を占めた。他に対象患者がいないこと（40%）、時間が確保できない（27%）などが挙げられた。

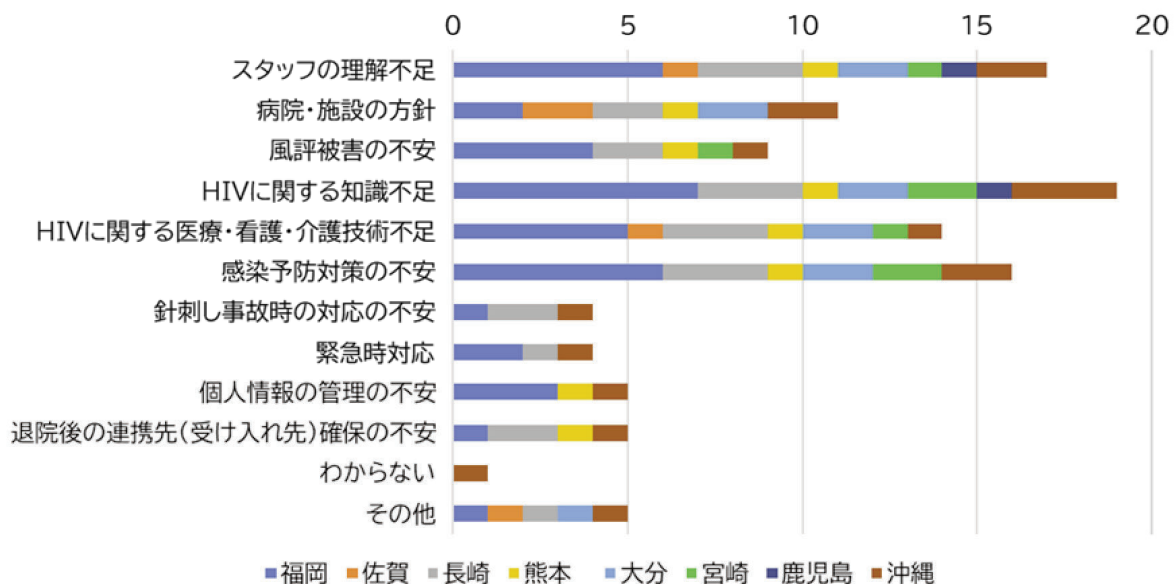


図1 受け入れを断られた理由 [n=22、複数選択]

一方、研修を行う上での課題としてマンパワー不足（28%）、研修費用の確保（28%）、研修時間の確保（22%）などが挙げられた。

- ④ HIV陽性者の受け入れ先紹介ネットワークの活用意向：地域の中で医療機関の壁を越えて、HIV陽性者の受け入れ先を紹介するネットワークが作られた場合、70%が「活用したい」と回答した。ネットワーク活用は九州全県から希望があった。
- ⑤ HIV陽性者の受け入れ先へのフォローアップについて：受け入れ先へのフォローアップの内容として、「患者に関する連携や相談」（60%）、「針刺し事故の緊急対応」（50%）、「緊急時対応」（47.5%）、「予防薬の相談」（37.5%）が主なものとして挙げられた。30拠点病院中、12拠点病院にて上記4項目をすべて実施していた。受け入れ先を確保するためには、受け入れ先が安心してケアできるフォローアップ体制を整備しておくことも重要である。

#### D. 考察

今年度は新型コロナウイルス感染蔓延の影響のため、オンラインを中心に研修を行った。オンラインによる利便性のため参加者は多く知識を広く普及するためには良かったが、実地における研修でしか習得できないものもあり、来年度以降、復活できることを期待する。

HIV陽性者の長期支援に関するアンケート調査の結果、九州全域で受け入れ先の確保の課題を抱えて

いることが明らかとなった。受け入れのための研修は効果的であるが、マンパワーや研修費用・時間の確保などの面から、拠点病院が行うには限界があり、行政機関や保健所と協働を望む拠点病院が多い。このような中で、受け入れ可能な施設をネットワーク化することで、拠点病院は患者の療養支援がしやすくなり、陽性者は地域の中で安心して療養生活を送ることができる。行政機関・保健所にとっては、ネットワーク構築の過程で社会資源の偏在を把握することができ、戦略的な啓発活動・社会資源の開拓に活かすことができる。

HIV陽性者の療養支援は社会全体の問題であり、行政・保健所と拠点病院や関係機関が連携・協働していく必要がある。今後は、HIV陽性者を支援する地域支援者（在宅の医療・介護・福祉サービス事業所等）間の連携や当事者支援団体とHIV拠点病院の連携を図り相互理解を推進するための「HIV地域支援者ネットワーク」を立ち上げる必要があると考えられる。

#### E. 結論

HIV陽性者の高齢化・長期療養は今後、進むことは明らかで、今は要介護者を抱えていない地域でも、先々受け入れ先確保は避けられない課題になると考えられる。現在、HIV陽性者の支援体制の整備は、拠点病院独自のネットワーク・コーディネート力で行われているが、今後は地域社会全体の問題として、行政・保健所と拠点病院や関係機関が連携・協働していく必要がある。HIVの有無にかかわら

ず、住み慣れた地域で医療介護を受けながら生活できる社会の実現に向けて、拠点病院と行政が協働し、HIV陽性者がこぼれ落ちない地域包括ケアシステムの早期実現が望まれる。

## F. 健康危険情報

なし

## G. 研究発表

### 1. 論文発表

- 1) Resistance of SARS-CoV-2 variants to neutralization by antibodies induced in convalescent patients with COVID-19. Yu Kaku, Takeo Kuwata, Hasan Md Zahid, Takao Hashiguchi, Takeshi Noda, Noriko Kuramoto, Shashwata Biswas, Kaho Matsumoto, Mikiko Shimizu, Yoko Kawanami, Kazuya Shimura, Chiho Onishi, Yukiko Muramoto, Tateki Suzuki, Jiei Sasaki, Yoji Nagasaki, Rumi Minami, Chihiro Motozono, Mako Toyoda, Hiroshi Takahashi, Hiroto Kishi, Kazuhiko Fujii, Tsuneyuki Tatsuke, Terumasa Ikeda, Yosuke Maeda, Takamasa Ueno, Yoshio Koyanagi, Hajime Iwagoe, Shuzo Matsushita, Cell Rep. 2021 Jul 13; 36(2): 109385. Published online 2021 Jun 25. doi: 10.1016/j.celrep.2021.10938
- 2) SARS-CoV-2 spike L452R variant evades cellular immunity and increases infectivity. Chihiro Motozono, Mako Toyoda, Jiri Zahradnik, Akatsuki Saito, Hesham Nasser, Toong Seng Tan, Isaac Ngare, Izumi Kimura, Keiya Uriu, Yusuke Kosugi, Yuan Yue, Ryo Shimizu, Jumpei Ito, Shiho Torii, Akiko Yonekawa, Nobuyuki Shimono, Yoji Nagasaki, Rumi Minami, Takashi Toya, Noritaka Sekiya, Takasuke Fukuhara, Yoshiharu Matsuura, Gideon Schreiber, The Genotype to Phenotype Japan (G2P-Japan) Consortium, Terumasa Ikeda, So Nakagawa, Takamasa Ueno, Kei Sato. Cell Host Microbe. 2021 Jul 14; 29(7): 1124-1136.e11. Published online 2021 Jun 15. doi: 10.1016/j.chom.2021.06.006

### 2. 学会発表

- 1) 患者さんのベネフィットから考えるHIV治療の薬剤選択～2剤療法の可能性を多角的に考える～ 南留美 第95回日本感染症学会学術講演会 第69回日本化学療法学会総会 2021 5/8 Hybrid 横浜
- 2) HIV感染症のoverview～診断から治療、長期合併症について～「HIV感染症における長期合併症」 南留美、第91回日本感染症学会西日

本地方会学術集会、第64回日本感染症学会中日本地方会学術集会、第69回日本化学療法学会西日本支部総会 合同学会 2021年11月5日 Hybrid 岐阜

- 3) 20歳-30歳代で注目したい合併症～体重増加・肥満を中心に 南留美、第35回日本エイズ学会学術集会・総会 2021/11/22 2021/11/21-11/23
- 4) 当院におけるHIV感染症合併血友病患者の標的関節超音波所見 山本政弘、南留美、高濱宗一郎、犬丸真司、長与由紀子、城崎真弓 第35回日本エイズ学会学術集会・総会 2021/11/21-11/23
- 5) 抗HIV療法中のHIV感染者の血中Lipopolysaccharide測定 南留美、高濱宗一郎、城崎真弓、長与由紀子、犬丸真司、小松真梨子、山本政弘 第35回日本エイズ学会学術集会・総会 2021/11/21-11/23
- 6) 「自分事としてHIV外来診療を考える」～長期療養時代におけるこれからのHIV診療 南留美、第35回日本エイズ学会学術集会・総会（シンポジウム） 2021/11/22 2021/11/21-11/23

## H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

### 1. 特許取得

なし

### 2. 実用新案登録

なし

### 3. その他

なし